

第44回岩手県環境審議会における次期「岩手県環境基本計画」に対する委員意見への対応

| | | 意見 | 対応 | 備考 |
|---|------|---|--|-----|
| 1 | 辻委員 | 本県の新型コロナウイルス罹患者数の少なさの要因の一つとして、環境とのバランスが取れた適切な人口密度がプラスに作用したと考えられる。この点をうまく本県のPRに使えるか。 | 御意見を踏まえ、第1章1の新型コロナウイルスに係る「現状と課題」の記述について、第2章3の「環境にやさしく健康で心豊かな暮らしの実現」に記載しているテレワーク等の働き方改革や移住に関する施策を念頭に、新型コロナウイルスを契機とした若年層や首都圏在住者の移住への関心の高まりや、こうした動きを踏まえて、豊かな自然環境等を生かした移住・定住の促進を図ることの重要性を追記した。 | P4 |
| 2 | 主演委員 | アメリカや中国など主要排出国がある中で、県民理解を得るためにも、岩手県がこれらの国々に対しメッセージを発する必要がある。これは県民向けでもあるし、世界、地球全体の問題でもある。 | 御意見を踏まえ、第1章1の気候変動に係る「現状と課題」の記述について、県民及び国内外へのメッセージとして、①気候変動問題は全世界の協力が必要な地球規模の課題であり、パリ協定では、全締約国が野心的な努力に取り組むことを求めていること、②本県がゼロ目標を掲げる意義について、全国有数の再エネポテンシャルを有する県として、世界の脱炭素化を牽引するとの国の方針を後押しすることにより、パリ協定の達成に向け地域から貢献することや、③本県の直接のメリットとして、パリ協定の理念にも通じる低排出型の地域経済社会の構築につながることを追記した。 | P7 |
| 3 | 辻委員 | 農地として維持されてきた二次的自然は貴重であり、農業の高度化や担い手の高齢化などによって知らないうちに失われる事例が多い。多様性の象徴としてのイヌワシの他に、身近な自然において、絶滅危惧種の残存など種の特定や再生産の状況等を調査し、アピールできる多様性を掘り起こし、保全策を講じることが重要ではないか。 | 農地等における生物多様性の確保については、第3章3の「生物多様性の保全・自然との共生」の「基本的考え方」や(1)の「生物多様性の保全」及び(3)の「森林、農地、海岸の環境保全機能の向上」の「施策の方向」に記載しているが、御意見の趣旨を踏まえ、第1章1の「生物多様性」に係る「現状と課題」の記述について、身近な自然における生物多様性の保全の重要性を明記するため、①人間の社会経済活動と生物多様性は密接に関係し、人間と自然との関わりが原因となって多様性の危機が発生していること、②そのため、県民一人ひとりが身近な問題として意識し、行動するよう、野生動植物の生息・生育調査の実施・情報提供等により、生物多様性を社会全体へ浸透させていくことが重要であることを追記した。 | P10 |
| 4 | 辻委員 | 概要版の2枚目の主な施策の方向に、「多自然川づくり」と「気候リスクに備えた河川改修」があるが、両者は相反する面を持っており、気候リスクに対応した防災・減災対策においては、どこまで環境に配慮できるかが問われている。 | 御意見を踏まえ、第2章2の「自然と共生した持続可能な県土づくり」の基本的な考え方の記述について、気候変動適応策の推進にあたって留意すべき事項として、国の気候変動適応計画の基本戦略にもある「環境保全と両立した適応策の検討」に関する記述を追加した。 | P30 |